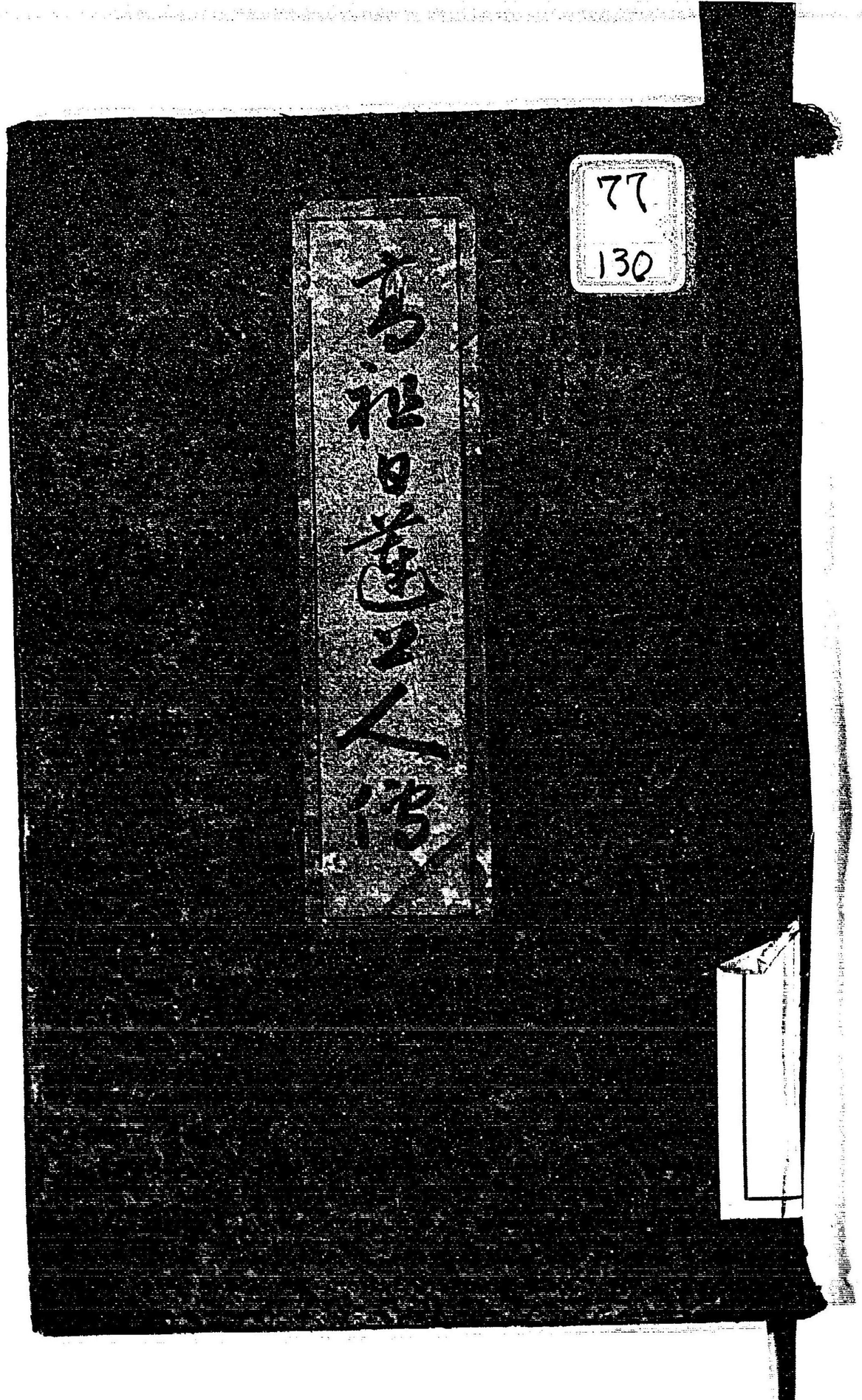


77
130

019934-000-1

77-130

高祖日蓮上人伝

井上　言信／編

M31. 1

ABH-0073

77-130

日蓮上人御肖像

高祖日蓮傳序

予佛法僧の三寶を知らす從て法華宗を識す日蓮上人を識さるなり而して自ら揣らす本篇を編述したる所以のものは何そや北條泰時か貞永の小康より泰平打續き浮屠氏權者と結び跳梁跋扈を極るの際に當り上人安房の邊隅に生れ眇たる後進の一介僧を以て斷々乎として法華の一旗幟を飜へし諸宗を斥け各派を駁ち先輩を罵り執權を諷し以て追放配流刎頸に處せらるゝも泰然自若として其所信を貫行するのみならず艱難に遭ことに勇氣の倍蓰する其膽不屈なる予は法界の偉人として尊崇するより寧ろ日本男兒の神髓を得たる英雄として敬服するものなり耶蘇の十字架上に縛せらるゝや號哭して哀を天に乞へり上人の

龍口に於ける從容整暇自己の死を以て弘法の利益となし徐ろに安心立命を樂む其宏量襟度之を宗教家として觀察するに亦耶蘇の下に在るものに非すと斷言せんと欲す予は該宗の信者に非す又上人の教義を圓滿完了とも認めす寧ろ或る點に於て議すべき處なきに非ずやとの觀念をも懷抱せり然れとも其事業を進行する上に於て眼中權威富貴もなけれは艱難苦楚もなし抑えんとすれは揚り尺を退けは尋を進め社會を呑吐する勇猛果敢剛膽不屈實に百世の龜鑑となすに足る嗚呼偉人なり英雄なり是予か佛典乘經に通せさるの身を以て敢て本書を草したる微意ありとす今や東洋多事なり國民須く此堅確不拔の氣象なかるべからず讀者乞ふ一片の稗史として視ることなくは幸甚

明治三十年十二月下澣　編者しるす

高祖日蓮傳

目次

第一　系譜と誕生……一
第二　入寺と剃髪……四
第三　苦學と立志……五
第四　鎌倉と淨土……八
第五　游學と各宗……一一
第六　立宗と放寺……一六
第七　法弟と說法……二四
第八　安國論と流罪……三一
第九　負傷と弘通……三九
第十　牒狀と法戰……四四

第十一　讒訴と龍口……四八
第十二　遠島と苦難……五五
第十三　免許と身延……六七
第十四　遺命と遷化……七四
第十五　附詠歌……七七

高祖日蓮傳

井上穆堂編

◎系譜と誕生

本地四八の妙相を韜し末法萬年の闇を照して法燈彌益光を添ふるある日蓮上人俗姓は貫名氏又三國氏ともいふ遠祖藤原鎌足公より出つ、父次郎重忠は遠州の諸侯にて同國山名郡貫名に領居する重實の子あり重忠性質忠直にして其職を勤め武備を治む然るに平家の殘黨に志を通ずるものとなし糺問をも遂けすして所領を沒收し房州長狹郡に流罪とあり東條市河の郷小湊といへる賴む方あき片海に罪おき罪に身を沈め、浮む瀨もあき磯村の伏屋に落付

たるは建仁三年五月の事にてありし、其後下總國路野邊ある大野吉清か女梅菊を迎へて妻とおしぬ、次郎は朝に海士の群に入り沖の小舟に命を任せて漁獵を事とし梅菊夜は麻を績き網を綴り賤か手業も馴れては常となり其暇〳〵には里の童に書讀む事、筆握る術など敎へて鄕人等の尊敬を受るはせめてもの慰めなりき、斯て承久三年夏の初め頃梅菊懷妊の身となり秋過き冬去り翌貞應元年二月十六日きさらきの空いと長閑に旭日潮にきらめく頃より産の氣つき午の刻ばかりに男子を生みおせり、稚兒は額廣く眉秀て鼻高く色白し其面貌凡あらねは此兒の生前いかあらんと二親の心のうちぞ頼もしき母梅菊常に日輪を信仰し崇拜怠りなきに因みて善日丸と名けけり是ぞ後

年各宗各派を排斥罵倒し、法華經こそ如來出世の一大事これを眞實經と名付け華嚴、阿含、方等、般若の經々は權經とて時を待間の權の方便と喝破し千辛万艱を經て新に法華宗の一旗幟を樹て其宗祖となりたる日蓮上人即ちこれなり。

上人の父、次郎重忠に五人の子あり嫡子は藤太重政次は早世す次は仲三重仲次は日蓮上人末子を藤平重友と號し此子孫藤平を姓とし今猶上總國大野の鄕に存せりといふ

因に云ふ上人の紋所井桁に廬橘を用ゐたる其起因は上人の遠祖鎌足公十二代の裔備中守共資京都を去りて遠江國に移り居り其軀男子なき事を憂ひ寛弘七年正月同

國引佐郡井谷明神に參詣し神前に祈誓を凝しける時廬橘の樹のもと筒井のほとりに綾衣に包みたる美しき男子の啼聲するあり共資懐き歸りて子とし共保と名け我か女に配合せり後ち神前の奇瑞を以て井桁に廬橘を家の紋所と定めけり

◎入寺と剃髪

同郡に清澄と云ふ山寺あり眞言密宗の靈山なり住職道善密師といへるは持戒堅固に道德高き聞えあり次郎重忠は善日丸を徒弟にと懇ろに頼みければ其容貌の優しく且逞しきを見て快く諾へ藥王麿と改名させ其儘此山に留めたるは天福元年五月十二日麿か十二歳の時なりけり、道善師深く意を注き教導しけるに記臆強く才學勝れ小學論語あとより儒道の書を授けるに一を聞て十を知るの譽あり滿山の所化達も並ならぬ立振舞の藥王やと稱えぬものぞなかりける、光陰は隙行く駒の足駛く春と明け秋と暮て嘉禎三年藥王麿十六歳となりけり道善師道場を淨め其十月八日剃髪の式いと嚴重に執り行ひ棄恩入無爲、眞實報恩者の文を唱へ翠滴る黑髪を剃り落して紅の袂をも墨染の袖と替え名をも是生坊蓮長と改め此れより諸事を擲け棄て專ら佛理に心を委ねけり

◎苦學と立志

蓮長は只管佛學の研窮に心を潛め、霜冴ゆる冬の夕も金

礫す夏の日も厭はばこそ彼を索め此を探りて且讀み且勤へ眞言瑜伽の奥藏を極め教相（大日經并拙心論等ナ云フ）事相（金胎兩部ノ諸尊法儀ヘ梵字悉曇等ナ傳受スルナ云フ）を習得し一代藏經を閲みする際は木を毬の如く丸く削り枕とし疲勞を覺ゆる時には此枕に肘を倚せて暫し氣を休め眠氣付きぬれば轉び傾くゆゑ快く睡に就きがたし、これは圓枕とて支那にて篤學の人造り初めたるものと聞く以て蓮長か苦學難業の一端をも知りぬべし、斯て蓮長學問を積み知見を擴めければ胸中自ら一大疑團こそ起りたれ、そは佛法といへゝ推あべて釋迦一代の法あるに今四分五裂に立別れ我か教、たふとし、我か宗まされりと己か隨意弘る法を我ぞ佛の本意を得たると彼を謗り是を駁ち更に統一なきに似たり天に二の日月なし如來の教法

二の道はあるべからず予幸に佛緣ありて法門の徒弟となりたれば何卒して一定の眞味を究め此の疑團を解釋ずはあるべからずと當山に安置せる虚空藏菩薩の御堂に至り食を斷ち人に見へず專念眞理を勤へ遂には堂の階砌を下る機に胸膈逼りて血を吐くまでに及びけり、これより境智大に開け雲露を拂ひて三光を見るか如く深く悟入せりといふ

上人晝夜肺肝を碎き一切經を閲了せり一切經は七千三百九十九卷の大冊なり釋迦三十歳檀特の峯を出て寂滅道場において說法すること三七日これを華嚴經といふ阿含十二年、方等十六年、般若十四年、以上四十二年、七十二歳の時靈鷲の嶺に法座を移し如來出世の本懷を述る事こゝ

に八年これを法華經といふ之を説きおはり涅槃經を遺戒とし八十歳の二月十五日涅槃の雲に隠れさせたり此一代の説相を一切經と名けけり、蓮長茲に於て謂らく八宗九宗に分れたるも畢竟するに各佛典の一端を心得全体に通ずるものあき故あり我こそは十方無凝の眸子をひらき其眞體を見定め一切衆生を利益せんと奮然志をそ起されける

◎鎌倉と淨土

蓮長今は人あれとも學匠あし寺あれとも法友なし山の書籍は讀みつくせり斯て此の片山里に惜しき月日を送らるへき鎌倉は將軍執政の地あれは名僧智識も數多かるべし

其宗々の明師に問ひ且は和漢の書をも細は智解を廣むる捷徑あらんと歴仁元年の初秋に清澄寺を立ち出て上總、下總を經て武藏ある隅田河原の片邊、穂末波なる枯蘆を分けつゝ行きて、とある茅屋に一夜の宿を假りけるに稚兒は釋迦の立像を玩器として毆ち叩き主人は念佛三昧に餘念もなし不思議の事やと問ひ質せは當時鎌倉に大阿といふ智僧あり其處に受戒しけるに末代の我等か自力の修行覺束なけれは阿彌陀如來の願力を頼みて淨土に參らるべし、されは念佛稱名に如はなし釋迦や藥師を禮拜するは雑行とて忌む事なりと諭れきと語るを聞きて蓮長只あきれに〳〵て法衣の袖に涙をおさへけり、さて主人より大阿の話を聞きたるも何かの因緣、そか許に尋ねゆき淨

土宗の極樂往生を聞かはやとひたすら道をば急きける蓮長鎌倉に着き頓かて大阿上人の住居ある鶴か澤好見の庵を訪ひ數多の男女に打交りて其法談を聽にけり

淨土宗は觀經、雙觀經、阿彌陀經に往生淨土論をそへて三經一論と稱し法然上人初て一切の經論を捨て之をもて宗旨を建て、いかなる惡逆の凡夫も他力を爲み念佛せは得脫往生疑ひなしと說けれは淨土の宗風早も四海に吹き渡り唱名念佛に靡かね草木もなき程なりき、蓮長も此念佛に心を委ね尙深く其奧義を極めはやと然阿良忠上人の許にも往通ひ修練なし玆に五年の星霜を經たり

鎌倉覇府も泰平打續きたれは人心自ら弛みて美榮を飾り華奢に流れ糸竹の遊戯に心を奪るゝ文人あれは白拍子に

媚を賣るの武者あり、なまめきたる風俗はいつか僧侶にも染移り此處に在りても思ひの外に得ること少けれはと旅の用意もそこ〳〵に鎌倉を立ち出故郷小湊に歸り兩親の健全なる面影を拜し鎌倉の物語に春の一夜も明けやすく翌朝は清澄寺に登りけるに絶えて久しき對面なれは師の坊を始め同學の法兄弟もこよなく喜び耳新しき談話に感じ入り蓮長の才學と達辨とに一山の衆徒驚嘆せぬはなかりけり、蓮長しはし清澄に居るうち一書を著し戒体即身就佛義と名け山内の僧徒に示せりこれ日蓮上人著述の始にして廿一歳の時なりき

◎遊學と各宗

清澄に留ること良久しく檐の柏に秋告て海原くらき時雨空、蓮長熟々思ふやう斯る邊土の浦山にて苟安を偸み有爲の日を空に送るは己か立志に背けり若かず是より京に上り叡山三井寺の學風を尋ね南都七大寺の經義を質し其他あらゆる靈場を巡り碩德を訪ひ未覺未到の玄理奥秘を極めんにはと、復び師の道善坊に暇を請ひ僧の身は旅の用意もいと輕く一杖一笠にて發足し鎌倉の宿舍にて圖らずも比叡山の坐主信尊の法弟尊海とて叡山の四俊と云はるるものに會ひたるに此回法用のありて當地へ參り其用向も果たり御身叡山に學問の志あらば同伴すべしと俱に暫時と枕かる鎌倉を打出て幾日かを富士の裾野琵琶の湖畔に費して叡山に到着す、山高く水清く伽藍僧堂簷を連ねて天を摩し樹木森々として生茂り四境萬古の風色を存す傳教大師か此山を開きける時

阿耨多羅三貌三菩提の佛達我か立杣に冥加あらせ給へ

と詠たるも宜ならずや蓮長深く感に堪へて我れ久く此の靈山に留りて修學し一世の大願を成就せんと傍視も觸れず勤學しけれは三千の學僧も其右に出るものなき程に至り遂に役寮の評議に依て東塔の圓頓坊といふ一院の住職とし寛元四年の春横川華芳谷なる淨光院の住職を兼させらる、こは其當時に在りて頗る名譽の事にてありし、蓮長我國法華の元祖傳教大師は漢土より歸り當山を開かる日出ぬれは星かくれ法華の大典ひとたび現れて一切の諸經何の光輝かある然るに中興の大智識といはるゝ慈覺大

師こそ心得ね法華に眞言を加味し酒に酢を加へたる如く宗瓜を濁せり今は一山のことりおく何時しか慈覺の宗風に落ち果たりと深くも感慨に胸を打たる是後年天台宗以外に立ちて法華の一宗を創始したる所以とそ知らる

蓮長勤學の暇に折々京都に出て五條油の小路より書籍を商ふ淨本か方を宿とし此頃圓爾和尚とて普門寺に住し臨濟を弘め又聖興寺に道源とて曹洞派を弘通する博學智辯の禪僧どもに親み、唐より來朝して鎌倉建長寺の開山となりし大覺禪師の泉涌寺に居たるを幸に其會下にひそみ見性成佛の禪味を探り、其後さゞ波や滋賀の三井寺より。青丹よし奈良の古都に出つ此處は佛法盛の地なれは世に奈良學といひ傳ふ蓮長東太興福二寺を始め蓮長普ねく巨

刹を歴巡りて所謂南都の六宗（六宗とは三論、倶舎、法相、成實華嚴、律、これなり）を研究し猶飽かて紀州高野山に登り弘法大師の靈迹を觀、眞言秘密の奥藏を極めんと雪降り埋つむ庵の中に一歳を送り。翌建長二年心長閑き春の空再び京都なる淨本か方に歸り來ね。」京都に大學三郎能本といふ儒者あり經史百家を渉獵し博學の名高く公卿貴紳の間に往來せり、蓮長之を訪ひたるに思ひ掛けなき比企能員か末子にて北條氏の爲に房州に配流され年こそ違へ同じ浦曲に育ちたるものなれは懷舊の情の堪へかたく暫し涙に時を移しけり、其後日々通ひて佛を敎へ儒を學び互に其才學を推奬せり能本後年上人の法弟となりて化導を助けり、蓮長我か日の本の敎ある敷島の道を學はんと冷泉爲家卿の門に入り古事記萬葉集

さては和歌の秘事までも懇切なる教を受け比叡山に歸り横川淨光院にひそみて專ら傳教大師の正義を求ます〳〵法華經は古今獨歩の眞經なるを悟り愈堅く心に決する處ありき、建長四年の冬、叡山十年の苦學に滿腹の學業と英氣とを藏め尊海始め數多の學友に暇を告け京都に出て心も春といさみつゝ、霞ともに打立ちて吾妻をさして下りけり、間の山淨明寺に少時宿りて、伊勢の神廟に奉拜し夫れより日數かさねて彌生の末つかた故郷小湊に歸り着けば兩親の喜ひ譬ん方なく取分け母の梅氣は嬉さ餘りて涙の外に出る言葉もなかりけり

◎立宗と放寺

蓮長頓て清澄に登けれは道善師久く待ち設たる事とて雀躍して歡び法兄淨圓義淨を始め山内の僧達を呼ひ集へ次郎重忠をも招き歸山の喜ひにと饗應されけり、蓮長父の仰もあれば其翌日下山して小湊に至りたるに重忠は笑顔もて側近く招き寄せ、昨日師の御坊竊に云へるやう山内に僧多く法弟あまた有れとも蓮長を措きて他に後住たらしむへきものあらじ我耳順を超たれは程なく寺を彼に讓りたしといと有り難き御言葉あり、されは此れより他行を思ひ止まり心を落付けて清澄の主となれ其身の立身出精のみかは我々夫婦の譽ありと子を思ふ親心、蓮長伏し俯きしばし思案に沈みつゝ今立宗の決心を語らば父母が當座の不興は免れ難し、されど言で果へき事ならねはと

思ひ切て父上少時聞き給へ我多年の修業にて釋尊の經典より各宗各派の法論をも殆と讀み了り、念佛眞言禪律諸宗の祖師等已か僻見より權教方便の經論を第一の者と誤れり、如來の說れたる眞實經末法五濁の闇を照すは法華經に限る今より多年修業の眞力と佛の冥助とに依て此教を弘め一切衆生を救はん決心なせり、されは八宗十宗僧侶等に仇とし讐として如何なる危難に會も計り難し、されと法の爲、世の爲に身命を捨るは出家となりし面目なりと述べけれは、母の梅菊先つ驚き餘事に心を移してとさま〳〵遮り止れど重忠悟る處やありけん法の御舟と身をなして業障ふかき人々を彼の岸に濟度する其慈悲をいかで止めん止めなよ願ふは廣宣流布の大願を遂け父母

よも佛果を得させよと許しければ、蓮長兩親をふし拜み喜び勇みて歸山あし徐ろに其發表の時機を待にけり

建長五年花咲く春も稍暮れて夏山茂る卯月の廿八日、東雲の空晴れ渡り、旭日波間を出る時しも香を焚て大禪定に入りたる身を起し徐歩して紅光潮を染る東天に向ひ、聲はからかに南無妙法蓮華經と十度ばかり繰り返して唱へらる是法華の宗か其題目として唱ふる眞誠の初聲あり

けり蓮長時に歳三十二歳

此日兼て說法あるよし觸れたりければ正午頃より壇越其他の男女を始め別て當郡の地頭東條左衛門景信等も登山し多年京學の蓮長か今日初めての說法あれば定めて尊き教もあらんと錐も立ち得ぬ混雜あり、蓮長出堂の太鼓と

共に徐々と高座に登り梵音しづかに說き出すやう我數年の游學修業により廣く各宗を學たり、成佛脫得の正法は妙法蓮華經を信心堅固に行ずるに在り法華經第二譬諭品に人之を信せずして此經を誹謗せば其人命終して無間地獄に落ちうかぶ時なかるべしと法華經は是經中の王なり、然るを淨土の法然は念佛を弘め選擇集を著して法華經を罵り禪宗は敎外別傳とて讀經修學を疎じ座禪工風に俗耳を驚し取り止なき宗門を立て法華經を侮り眞言は大日を尊みて釋迦如來を蔑み法界に二王を造るもの律宗亦然り此等無得道の邪流は佛の道を絕するものあり、念佛無間、禪天魔、眞言亡國、律國賊（妙滿寺派と眞宗との訴訟沙汰となりたる所謂四個の格言これなり）邪宗小法賴むに足らず是敢て私の詞にあらず皆經文にて見定めたり

法華經流布は今の時あり必ず迷なしそと、法華經を高く捧け剛邁の氣象に雄辨滔々と演ければ聽衆俄に驕き立ち狂僧よ痴呆よ、あゝ勿体なや彌陀を誹りおのか宗旨の眞言まて言ひ罵るとは汝佛敵我か耳穢せりと或は怒り或は嘲り、中にも此山に年拾ひし圓智坊といへるか雪の如き白髮を逆立て骨ばかりなる腕を扼け我も法華經を信じて讀誦なす事數十年、汝啄青き分際を以て其經文を讀みたりとて諸宗を侮り碩德を誹り特には眞言宗まて惡口するとは何を痴迷たるぞ疾く〳〵蓮長引出せと齒咬みをあして叫ひけり、地頭の左衛門景信も道善に對ひ傲慢無禮の蓮長奴切て捨るは易けれど此の靈山に血を流すは憚りあり且は刀の手前も面目あき故、しはし容赦はなしたれど

立宗唱罵之図

其儘よ差おかば如何なる事を云ひ出さんも測れず寺門の耻辱此上なし我連れ歸らん御任せあれと云ひ出たり、道善戰き慄ひながら公の怒りは尤なれど狂氣ものを如何すべき我懲して正氣とあさん程に此坊に預給はれと強て性命を乞ひければ地頭も止むなく立去りぬ、道善師は蓮長を坊に招き呆あからに汝か今日の說法は抑も何たる事ぞや狂る性根を飜さば好し、さなくは此山に置き難し何地へなりとも身を寄せ景信か眼に當り刀の錆とおらぬよう心をつけよと幼者を懲すが如く叱りもすれど師弟の情愛の籠れる敎訓、身に浸みて中々に有難かりけり、されと蓮長は素より期したるとなれは老師の恩を拜みつゝ下山しけるに後より法兄淨顯義淨の兩人追ひ驅來り地頭の怒

り尚解ず山を下らば切て捨んと待つと聞く此方へ來り給ひねと闇にまきれて間道より西條の郷華房なる蓮華寺といふ眞言の寺に身を隠し僅に危難を免れたり

斯て蓮長は此の華房の里に在ける内、村人等阿彌陀堂を建立し蓮長か博學多識の名僧なるよし聞き知り、そか開堂の導師たらんことを請ひ男女の衆遠近より集り來たり滿堂せましと押合けり、蓮長高座に上り清澄にてものしたる説法と同じ意味もて念佛宗を攻撃あせは群衆一同に起上り、佛を謗る賣僧夫引出して打擲せよとおめき叫びて悪口なせり、蓮長今は寺に歸ることも叶はで小港に至り、兩親に暇を告げ時めく將軍の膝元なる鎌倉に出智識も多き彼の地まて法を弘めんこそ甲斐あれと決心愈堅固

なり、此時父重忠は妙日、母梅菊は妙蓮と法名を定め御身か弘むる妙法蓮華經の受戒せんと持佛の前に誓けり是衆生教化の始なり、蓮長父母の法名一字つゝを取て我か名とし日蓮と改名せり

日蓮の母梅菊日輪、蓮華に乘りて表れ給ふと夢みて懷姙し其奇瑞に感じて日蓮と改名す又父母の妙日、妙蓮も妙法の妙字と其靈夢に因みて斯く名けりとか

◎法弟と說法

其年五月の中旬日蓮は鎌倉に到り大町の南名越の東の山際に、ささやかなる庵を結ひて熱心に經文を讀誦し如法堅固に身をまもりつゝ其間に紹介を求め鶴ヶ岡の經藏に

入り勉學するの外更らに他事なく見えにけり、冬の初めつかた人も訪ふなき此庵に年齡三十はかりなる人品骨相氣高き一人の法師入り來り慇懃に敬禮して拙僧は叡山にて修業なす成辨と云ふものなり、多年研學したりしに、傳教大師の學風か却て中興の祖とも稱へらるゝ慈覺大師の爲に濁り亂れたるにあらずやとの疑ひを起し夫を學頭に質たるに其許は蓮長の弟子にあらぬか、彼も慈覺は佛敵なり法敵なりと罵り三塔の學者と議論合はず其儘下山なせりと聞き我と同じ見解の人もありやと嬉の餘り貴僧か許を尋ね參れり、希は教示を受け胸に限なす雲霧をおし排き眞如の月を視せ給へと渴仰の念に堪得ぬ態なれは日蓮も不思議の際會と打喜ひ留め置きけり、此より疑問

の數〳〵寢食を忘れて懇に教導しければ成辨深くも感じ入り且才學勝れしものとて日ならす本化の宗流を識り得て改て法弟とあり名を日昭と改め水に薪に朝夕の炊事までゝまめやかに事へけり、日蓮或る時日昭に向ひ我れ兼ての志願なる法華經を弘め其利益を洽く衆生に及ぼさんとす、されば僧俗數多の敵を受けいかなる危難に遭ふもはかり難し、諸宗退治の爲一身を捨るは固より期する所なれば必す我を顧みず信心有緣の輩を集め飽まて本陣を崩すなかれと丁寧に申し含められき、後年日蓮上人鎌倉を追出されし事二十餘度伊豆に三年佐渡に四年の流罪又龍の口の大難にも徒弟歸依の人々を集め法談に餘念なきか如きは此時の依囑を守られしものなりとか、是六老僧の

第一大成辨日昭上人とて日蓮常に辨殿と呼れし方あり日蓮法弟日昭を得てより勇氣頓に加はり名越の往還近き處に出て說法しけるに鎌倉市中は勿論遠近とも不思議の僧やと語り傳へ聽聞するものいと多し、されど其說く所念佛を斥け、眞言を罵り、禪律を邪法とし、法華經の外に正法あらずと語りければ聽衆或は賣僧と罵り或は痴坊と嘲り果は木片瓦礫をさえ抛付るものあり、其中北條の一族江馬遠江守の近臣にて文武の譽高き四條金吾頼基歸依し深く信仰して衣服食物をも斷えず供養し、同じ北條の家臣進士太郎善春も法緣淺からず敎を受け明暮侍きけり、下總國能手の印東次郎左工門有國も上人の說法を即き其敎化の有難き晝夜に忘れ兼慕しさの餘り一子吉祥十

歳なるを遙々國より携來たり此兒は日昭の甥あり法兄弟も宿世の因緣徒弟になして給れと請はれける、後年大國阿闍梨日朗上人とて法弟多き中にも忠實第一と聞ゆしは即ち此吉祥ありけり

下總國若宮に住し上總下總兩國に跨り知行を領する富木播磨守胤繼と云ふ諸侯あり、日蓮の母梅菊の實家とは繋る緣あれば日蓮が鎌倉の遊學叡山の修業等二十年間の學資を贈れり、日蓮思ふよう我れ妙法の幟を飜し正法を弘通せんには先つ恩人富木氏を濟度して其利益を受しむるこそ順序あらめと、急き若宮に赴きたるに富木は鎌倉へ參勤の爲今しも舟にて乘り出せりと聞き、そこ〳〵に暇を告け磯傳へ二子濱を見渡せば紅白吹き貫の船印、家の

定紋の幕打廻し沖合遠く漕き出るを日蓮しばしと呼ひ止め直に船中にて富木と面會し別後の無事を賀する其詞の未た了ぬに、胤繼は日蓮を睨へ息卷荒く汝は長の年月如何なる學問修業をなしたるぞ、古鄕安房へ歸り諸宗を駁ち長者を嘲り口に任せて惡口雜言せしよし惡魔の爲に憑かれしか高慢の爲に逆上せしか我の學資を贈りたるは斯る墮落の道心を養ひて佛門に仇させん爲めにあらさるぞと罵りけるを、日蓮臆する氣色もなく釋迦一代說相の目的は眞實經たる法華經にあるを懇切に說き諭しければ道理に明るき胤繼とて速に心解けて其蠢忽を謝し爾來法華宗に歸依せんと堅く誓を立てられけり、日蓮是より弘通の念一層堅固となり日々辻町の東小町の往來繁き十字

街頭に立ち、諸宗無得道、墮地獄と叫ひ末法當今の衆生の爲メは南無妙法蓮華經の外成佛往生の道はあらずと、聲を限りに繰り返し〳〵說き立てければ黑山の如くに集りたる僧俗男女の惡口雜言實にたゞことあらず見えにける、其辻說法の古蹟日蓮腰懸石として今にその俤は殘りけり、房州天津の領主工藤左近之亟吉隆、武州荏原郡千束の鄕を領地とする池上右衛門太夫宗仲並に其弟兵衛志、武州荏原を領する荏原左衛門義宗、甲州飯野の御牧波木井の三ヶ鄕を領する南部六郎實長なんとの名家續々檀越となり本門の大戒を受にける、後年身延山を寄附奉る妙法流布の基を開き大本山となしたりしは此の南部實長なりけり

◎安國論と流罪

正嘉二年正月六日日蓮は日朗を從ひ駿州岩本實相寺の經藏に趣けり、近年天變地妖打ち續き特に前年三月より六月まて雨降らす八月大地震あり人畜死傷夥ゝ五穀登らず餓莩道に充つ、日蓮は之を以て今法華經の弘まるへき時節なるを權經諸宗の邪法に障れて正法の立ざるを天怒り地罰するものと信認し是まて四度一切經を閲したるも尙此事を經文に照し一々證據となるべき要文を撰まんとて發足せられたり、日蓮實相寺の經藏に入り一切經を閲讀する傍ら學頭智海等の請ひに任せ時々摩訶止觀の講義をなさるに駿州富士郡上野に領居し世ゝ上野殿と稱せら

る丶南條兵衛七郎を始め其他信仰歸依の者少からさりき、當山に伯耆坊とて三井寺に上り修學し母の喪に中り歸り居る所化あり齢十四歳日蓮を慕ひ隨喜の心止み難く沼津まて追ひ來り法弟とからんとを乞ひけれは其志を憐み鎌倉に携へ歸り名を日興と命ず後年白蓮阿闍梨とて六老僧の第三位に居れたるは此の坊なりけり

日蓮實相寺に在りし間に嚴父重忠逝去の訃を得て歎き悲み鎌倉より歸り直に日朗を供とし房州小湊に趣き慈母を慰め讀經供養いと懇に百ケ日の佛事を營み鎌倉に歸りけるか、諸國飢饉のうへに疫病流行し飢に叫び病に泣き死者相續き困頓流離の慘狀實に目も當られぬ有樣なり、日蓮法衣の袖を絞りつ丶是みな佛法の非なるか故ありと堅く

信じ、一卷の書を綴り正法を立て國を安すくする義を取て之を立正安國論と名け大學三郎能本をして字句の訂正をなさゝめ、文應元年七月十六日奉行宿谷左衛門尉光則か邸に持參し前執權北條時頼に呈しける、其書面のあまりに過激にして且少の忌憚もなければ時頼を始め其他の人々も只驚き呆れ誰一人採用せんと云ふものなし、安國論は日蓮の一生に於て最も價値ある事實なれば左に其大要を摘記んに

國は法に依て榮ゆ、法は人に依て立つ、近年打續き災異の來るは世の人の正に背き惡に歸ゝ末法應時の法華經は諸宗の惡義の爲に其利益あらはれず、正法誹謗の罪深く諸天善神此國を捨て守らす、惡鬼厲鬼、國土に

充滿するか故なり、金光明經に正法に背けば其國に七難起ると見えたり其七難の中五難既に顯れたれど二難未た起らす其二難とは自界叛逆難とて此國に軍起ること、他國侵逼難とて外國より此國を攻ることの二なり、若し法華を尊信し念佛禪律を抛下せずんは國家の一大危難起らんと

時賴日蓮に面會し天下の政事を侮り萬人の信心を惑すこと出家沙門の所行にあるへきやと、前執權職の權威をもて制止んとするも屈せさるのみかは、益々自說を主張しけれは時賴重時ともに深く日蓮を嫌忌せり、斯くと聞きたる諸宗の僧俗等北條殿に疎るゝ日蓮奴を殺したりとてよも咎めはあるまじ、阿彌陀如來の怨敵、我れ先き駈け

て首討たんと百人許り打揃ひ、八月廿七日名越松葉ヶ谷の菴室に押寄せ火を放ちて攻め立てける、日蓮は東の山つたへ逃け遁れ進士太郎と能登坊と唯二人にて防き合ひ數箇處の創さえ受け菴室は早一片の灰燼となり了りぬ俗に松葉ヶ谷燒討の法難と稱するもの是なり、富木播磨守此の變を聞き大に驚き人を馳て下總に迎へ取り其無難を喜び厚く歡待し更に邸內に法華堂を營み法蓮を開きける曾谷入道敎信、秋元太郎、太田乘明なんとの國主名士等を初めとし改宗歸依して檀越とあるものいと多し、今の中山大本山法華經寺は即ち此法座の蹟なりけり、名越の庵室も燒失の後、法弟の盡力、信者の喜捨により再築功を竣へたりと告け來りけれは再び鎌倉に趣けり

艱難を經る毎に益々勇氣の加るは日蓮の天性なり此時より折伏の舌鋒するどく諸宗を攻め擊ちければ執權北條時宗幼少に付き補佐役たる仝長時僧俗諸人の讒言を信じ、弘長元年五月十二日の朝日蓮を召捕一應の吟味をも爲さず只重き罪人として伊豆の伊東へ流されける、法弟檀越等驚き騷けどせんすべなく悲歎に呉れ居り、中にも日朗は徒跣にて由比か濱まて追ひ掛け來たり纒に縋り我も同船さしてと泣き悲めとも却て役人の爲に打ちすへられ其うち船は西の方沙風吹き立つ朝靄に影をも見ゑずなりにけり、伊豆の岬に近付く頃より西風吹起り船の動搖烈くして濱邊に着けがたし日蓮をは無情にも荒波打ち越す磯の小島に棄て置きて鎌倉さして歸り去りぬ、日蓮は題目

を唱ひ生死を天に任せ居けるに彌三郎といふ漁者に救れ人顏わかぬ黃昏ごろ其か伏屋に助け入れられ、夫婦か厚き供養に三十日餘りを此家に送り、伊藤の領主莊司八郎左衛門朝高第一に歸依し嘗て和泉にて因みたる江川太郎左工門吉久も宿緣淺からす其說法を聞き一門殘りなく改宗す信仰のもの日毎に增加せり、鎌倉にても日昭日朗留守をあつかり師に代りて法弟檀越を敎化る少しの油斷もあらざりき、弘長三年五月廿二日赦免となり鎌倉に歸りけれは法弟檀越等の喜ひ譬んかたなく皆々其無事を祝し三年このかたの長物語りに刻の移るを知らす猶行く末の事とも打ち案じ、法燈すでに關東の野を照せり此上は折伏を止め本門の敎化弘通こそ望ましけれと請へは日蓮そ

ば慈悲に似て慈悲に非す病に藥へ止め難しと聞入れざりし

因に云ふ日蓮伊東へ配流中日朗愛慕に堪へず師の像を彫刻して朝夕事へけり、此像今は武藏國豊多摩郡堀の内村日圓山妙法寺に傳へ、現證救護の利益多しとて宗門の參詣者頗る夥し、

茲に駿州松野の邑主松野六郎左工門夙く檀越となり歸依淺からざりしか一子松千代剃髮して叡山に學び其宗法心に染ずとて本國に歸り岩本實相寺にて日興か日蓮に隨身したるよしを聞き直に鎌倉に至り其顚末を語り法弟とあらん事を請ふ、是後年六老僧の一人能登阿闍梨日持上人とて、永仁三年正月元日齡四十六歳を以て門出し、朝鮮より支那に渡り妙法を弘通したる英傑なり此時二十一歳

◎負傷と弘通

文永元年秋の最中の月痩せて雁の初音に古鄕の空のいとど懷しく、日蓮は日朗日澄の兩人を將て小湊に歸省しけるに折節母は急病に罹り息も絶え〳〵なる有樣なれは大に驚き醫藥に介抱に、病即消滅の經文を誦し、孝養少しも怠りなけれは日ならず快癒し母堂ら喜悅一方あらざりき、當國男金村小林民部實信は日蓮の父、故重忠とは舊き朋友とて其子藤十郎十一歳を法弟となしぬ、後年六老僧の其一人として身延山第二世民部日向上人となりたる

は此兒ありけり

日蓮は師匠道善坊か幼年教養の恩を思ひ、そを報謝せんとて九月中旬華房の蓮華寺に入り清澄に使を馳せて通報忘置き、住持淨圓の爲に念佛無間書といふを著わし諸宗と法華との勝劣を諭しなとし居けるに、道善和尚老軀を杖に助けられ蓮華寺に來り日蓮を見て脆くも涙を流し斯はかり昇達せんとは思はざりし抔幼き時の物語りして最と嬉しきさまなり、日蓮は其長壽を賀し尙種々教化しけるにぞ聞く耳疎くも多年迷ひの雲晴れて歸山なせり、天津の領主工藤左近之亟吉隆深く日蓮に歸依し十一月十一日使をもて招待しけるにぞ程遠かならぬ所とて、日蓮は午の刻はかりに日朗、日澄、鏡忍、乘觀等十餘人の男女を

伴ひ天津をさして急けるに、地頭の東條景信は立宗の當時の說法よりして深くも日蓮を憤怒し手勢百餘人を小松原に伏させ一聲の合圖と共に各刃物を持ちて不意に打て出で、己れ阿彌陀の佛敵、思ひ知れと十重二十重に圍み日蓮さしてぞ斬りかゝる、法弟信者は日蓮に怪我あらせずと氣を焦ち騷き狂ふも物の用に立つべきは僅か四五人に過ぎざりければ何かはもつて支ゆへき、鏡忍坊は切られ、左藤次は射られ、乘觀、長英も既に危く見なける所に、工藤吉隆は三四人を具して出迎ひ此体を見て大いに驚き法門守護の爲には身命も如何てか惜むべきと勢ひ鋭く馳せ來り、景信目懸て切てかゝれは東條勢も一時は僻易して見えたるか多勢に無勢の悲さ、前後左右より減多

に切立てられ敢なく最後を遂げけり、景信之に勢ひを得て汝日蓮眞二つと、馬上より大刀ふり翳して切りつくるを日蓮念珠を以て受けるに餘れる切先額に觸れ三寸ばかりの傷を負ひけり、剛毅の日蓮とて少しも萎む氣色なくはつたと睨て太聲叱吒すれば、景信躊躇をりから、吹き來る風に霧立ちて咫尺もわかぬ其の中に身を晦し、武藏往還の市か坂迄來りたるに風寒き上に雪さへ降り加はり疵の疼みの堪へかたく山根の洞に夜を明しけるに、會々一人の老婆來掛り額の疵を見て大に驚き身にしみわたる雪風の若しや疵口にも入らは惡かるべしと、自ら被りし綿帽子を脱きて贈りける、今に上人の像に綿帽子を蒙らむるもの此因緣とぞ知られる、吉隆の父工藤行光日

蓮を尋づね我か邸に請じ其子吉隆小松原において討死したるは法華經の爲なれば佛門の忠臣なりと悔る色さゝ見はさりけり、日蓮は吉隆の横死を憐み自ら導師となり、妙門の儀式をもつて送葬せり、東條景信は小松原の時負ひたる疵、基となり非業の死を遂けたるより之を見聞くもの佛罰として畏れ恐れて歸依するもの多かりき

文永二年の春日蓮安房を發足して下總に至り鼻和の眞言宗の一寺を蓮乘寺と改め法華宗に入らしめ、常陸より下野に到り道すがら中風の心持せられければ奈須鹽原の温泉に浴して養生しなから法華の幟を飜し、宇都宮の城主下野守景綱並に其姉妙正を教化し、上總國奥津の領主佐久間十郎左工門重貞も一門殘らず改宗せり、早くも二

年を旅寓にて送り文永四年母妙蓮尼復び病に罹り晝夜の看護も其甲斐なく逝去ければ百日の間墓側に讀經せり、藻原の邑主齊藤兼綱を化導して其年の冬を富木の邸にて越し其子十六歳なるを徒弟とし名を日頂と命ず後年伊豫阿闍梨と號し六老僧の一人となりしもの是なり、文永五年の春、霞と共に下總を立ち出て鎌倉名越の庵室に歸りけり

◎牒狀と法戰

今歳正月十八日大元蒙古國より牒狀、京都に達す、其云ふところ和親修好に在りと雖ども四百餘州を征伐し、朝鮮國を歸服し、新勝の餘威をもつて脅迫の意味を含みたる無禮の文言なれば京、鎌倉の評議區々なりしも遂に返翰に及はず其儘使者を追ひ歸せり、日蓮九ヶ年前安國論にて諫めたる豫言と符合したるのみならず正嘉の大地震文永の饑饉疫癘は念佛禪宗等の邪法はびこり法華の邪魔なす故なりとて、宿屋左工門光則に一篇の書を認め此外敵を退治するものは日本國中日蓮唯一人なり之を經文に勘へ國の爲法の爲言上すとありけるも更に返答なし、依て其年十一月十一日復び執權北條時宗に書を送りて天下の安危存亡は法の邪正に在り、されば諸宗の僧侶を集め此日蓮と問答し何れか正にして何れか惡なりをと決し、純正の御經に歸依あらば國の安泰疑なし、外寇を調伏する事日蓮にあらずば協ふべからず、今我が言を御用ひな

くは定て後悔之あるべしと記し、平賴綱、北條彌源太、極樂寺の良觀、建長寺の道隆、に書を與へ法華を誹る者は三世諸佛の大怨敵なり、國難正に逼りて安國論に載せたる如くなれり、從來の心を飜し速に此日蓮に歸伏せよ否らざれば來て對決せられよ、日蓮こを蒙古國退治の大將なれと、斷々乎として法戰を挑み大佛殿の別當隆觀、淨光明寺、壽福寺、多寶寺、門樂寺等へ同じ趣の戰書を送りぬ、勇猛壯烈以て其自信の厚きを知り得べし、又弟子檀越に權門の人々國の危急に瀕するを知らず諸宗の讒言を信じ反て法華の行者を責惱せり、他日日蓮を捕へて流罪死罪に處するも測られず我弟子檀那たるもの少しも驚くなかれ豫々用心して妻子を思ふてなかれ權威に恐ること莫れ一乘法華の爲に命を捨て佛果を得らるべしと告けにけり、諸宗の寺々何れも日蓮の書に添文して讒訴し日蓮は信心を迷すものあり、日蓮死せずは佛法亂離となり、國土亦安穩ならず怀聞は上けけり、

牒狀と法戰

其間に甲州巨摩に生れたる法弟日進を得、是十三歲の時日朗と共に宿谷の土の牢に入り後年身延山第三世を相續したる俊僧なり、日蓮は日進を得てより甲州に弘法せんと欲し尙險き山の姿に已か志を養ひ、淸き水の音に浮世の塵を洗はばやと、思ひ立つ日を黃道吉日程おく甲州に入り鹽谷平内を始め數多の檀徒を授戒し富士山に登り無雙の風景を賞歎し山の半腹に法華經を埋め廣宣流布の基を定む經ケ嶽これなり、歸り道には小立の村長渡邊藤太

夫始め上行寺、法蓮寺、立正寺等改宗して歸依するもの頗る多し、文永七年二月十四日嚴父の十三回忌に當れは盛なる法會を營み厚く其冥福を祈れり

◎讒訴と龍口

文永八年花咲く春は來れとも何となく穩ならぬ今日この頃、人の心も朧夜の影定めなき彌生空、蒙古よりは兩度の使に返事おきを憤り趙良弼を使として又々筑紫に來るよし註進ありけれは上下鬼胎を懷きて落付かさりき、六月大旱兩降らさること數十日極樂寺の良觀上人台命により兩請ひしたるを日蓮使を遣はし邪法の祈り善神の受くへき筈やはあると其効なきを豫言して嘲笑せり、さる程

に諸宗の僧俗等日蓮を惡む事一方ならず其肉を噉わんとまて罵り騷けとも誰ありて堂々と法義經論を以て說き伏せんと云ふものなく今い問註所に訴へ上け公威を借るの外おしと各々樣々に讒訴せり、九月十日日蓮問註所に召出され訊問さるるに聊屈する氣色のなきのみか雄辯滔々と淀みもなく述べ立てけれは列座の官吏も顏見合せ出す詞もなかりけり、同じ十二日安國論を携へ平左工門尉か邸に到り今一度御熟覽の上宜く評定せらるべしと添書をして差出したり、時宗等ます〳〵之を惡み佛法に口を籍りて國事を非義し上を侮り下を誑り其罪輕からす絆ゆるかせに爲さは天下の大事を引き起さんと日蓮を斬罪に處すへく評決せらる、平の左工門頼綱兵士三百人を率ゐ名

越の菴室に押寄せ來る寔は文永八年九月十二日にして、夕日も曇る黄昏ごろ日蓮ゝ法弟檀越を集へ法談の眞最中人馬の足音たゞごとならねば急度戸外を見渡すに賴綱馬上にて駈け來り怒りの聲あら〳〵しく、日頃の惡僧日蓮奴、最早其罪遁れかたし今日死罪に行ふべしと、館の嚴命なり、者共疾く〳〵引縛れと下知しけるにそ、群集の參詣俄に騷き立ち、法弟等は師の一大事と泣き悲めど爲ん術なく唯驚き叫ぶ其中に、日蓮は徐に釋迦の像と法華經を懷中に納めたるに、齊藤三郎は襟筋取つて引据ゑ、少輔坊は懷中の經卷を引出し面部したたかに打擲す、雜兵等も土足の儘堂上を踏み荒らして、佛壇を打毀し經文を引き裂き、日蓮をゝ手を捉り足を捕へて痩たる肌馬に

藁莚を敷き之れに乘せ長刀拔き連れ警固嚴重に鎌倉市中を引き廻るに、兼て惡みたる諸宗の男女等、日蓮か日頃の高慢放言も佛罰覿面あの姿になりたるはと、後指さして笑ふもあれば彌陀の仇今日復しぬと雀躍するもあり、これより夜に入て長谷の小路を行き御靈の社の前にて伴ひ來りし熊王四郎を呼び、祠の北なる四條金吾賴基の宅へ我が最後の事を知らしめよとありければ、金吾賴基かくと聞くより兄弟四人徒跣にて走り出て馬の口に取縋り涙おがらに隨ひ行きぬ、頓て津村にかゝりたるに豫て日蓮に歸依して渴仰せる七十近き老婆は今日しも上人の頸刎らるゝ由聞きて驚くこと一方ならず、せめて老後の思ひ出に赤き心をうつしてし牡丹の花の赤豆餅、これ

供養せんと赤豆を煎居し其間に上人は我が門前を過き行くさまなれば、老婆は狼狽て握り飯に胡麻鹽をつけしを折敷尋る間もなく鍋蓋の裏に載せて追ひ驅け來たりけり、日蓮其志を受けて快く之を喫し固瀬の刑場龍口へぞ行かれける、其場處には幕縱横に張り廻し警固の武士篝火を焚いていと嚴重に圍み頓て馬より引き下し荒薦の上に据られけり、日蓮かはる氣色もなく徐ろに讀經すれば日郎、日進、日向、日興、四條、池上、荏原等の法弟檀越題目を唱ふれど落る涙に聲さへ曇りていとも悲しきさまあり、四條頼基さし俯き恩師、今死し賜はは生きて何かせん私も法の爲に殉死せんと泣けれは日蓮笑みを含みいかに殿原、法華經の爲に身を捨でんことは日來月來覺悟なしたる事なり今更何をか驚ぐべき此の首を捨て佛果を得るは瓦を玉に換るに同じ喜ばしき限りにこそと從容自若たり、劒子依智三郎直重は蛇胴の名劍を拔き放し玉散る刃尖に水うちそゝぎ既に斯よと見ゆける、折しも黑雲驀然雨を捲て吹き來り、雷光閃き、雷霆轟き、天地亦爲に震動す、立列ねたる松火、提灯、篝火も一時に滅て眞の闇、三郎直重思はず心を奪はれ二足三足退きたるも斯てあるべきにあらねば思ひ切て切り下し、首は前に落たりと思ひの外、日蓮端然と座し居るにぞ直重驚き仕損じたりと復た振り上くれば、こはいかに最初何をや切たりけん流石の名劍も鍔元より三段に打て飛び散りたり、其所へ南條七郎赦免の狀を携へ日蓮か命助けよと鎌倉殿の中

付なりと馳せ來りければ危き性命を取り止めたり、日蓮時に齢五十歳

今も猶片瀬の本山龍口寺に於て毎年九月十二日の會式に、胡麻の牡丹餅を供するは此時の因縁にて、宗門にては御首繼餅又御難の餅と稱ふるとか

一説に平左工門天變地異の爲日蓮か首切り難きよし馬を馳せて注進す、鎌倉にても不測の災變に驚き惧れ日蓮を赦免す、南條七郎其狀をさゝけ馬を飛ばせたりか七里が濱の中央金洗澤の川邊にて彼の固瀬よりの使者に行き合ひ赦免狀を渡す、夫より此川を今に行合川と呼びなせりとぞ

熊王四郎は鎌倉炭賣川の邊にわびしき住居をあし夙く

父母に訣れて孤獨の童となり、十六歳の時深くも日蓮に歸依し薪水の勞に服せんと願ひければ宿世の因緣にやと其意にまかせたるに數年一日の如く眞實に事へけり

◎遠島と苦難

日蓮一旦赦免せらしも鎌倉に歸ること協はで、當國愛甲郡依智の鄕、本間六郎左工門重連が方に到りたるに隨身歸依の後を慕ひ來るもの前後百餘人の多きに至れり、六郎重連は佐渡國加茂郡を領ち此頃は彼の地に在て家に居らず依て左工門賴綱は重連の一族にて其留守を司る本間三郎左工門に日蓮を預け鎌倉の沙汰を待けるところに、

本間右馬尉鎌倉より立て文を持ち歸る其趣は日蓮を本間六郎左工門か預として佐渡に渡すべし必す過失あるべからず云々、本間十郎又鎌倉より馳せ歸り名越の菴室にては十三日の昧爽日昭師を始め御弟子の方々由比の濱土といふに潛み隱れたるを日朗日進の兩法弟はさすかに去り難く徘徊顧望の折柄邪法の徒黨なりとてあまた兵士の爲に捕縛せられ、宿屋左工門の預りとして土の牢に押し籠められたりと鎌倉中の風聞のよし物語れは大膽剛氣の日蓮も子弟の情愛にはたされ只管悲嘆に沈みけり、されど堅確不屈の氣象とて斯る際にも教化を怠らず十三十四の兩日に本間一族を始め男女の受戒したるもの七十八人僧分の者二十五人の多きに及びけり、其後四條頼基、富木

播磨、太田左工門、曾谷入道、金原法橋等へ書面を以て法門を說き信心堅固に之れあるへきよしを諭せり、十月三日霜夜の寒さ堪へかたく夜明わびしく思ふにつけ日朗か在牢の苦みを想ひ與へける書に、本月七日佐渡の國へ罷る世間には法華經を讀む口はかり讀ども心に讀まず心に讀とも身に讀まず貴邊は心と身とに讀みたれは父母並に一切衆生を救ふへき佛果あるべし今夜の寒氣に牢の中の躰相思ひやられて痛はしくこそ覺るなれ赦免ありて牢を出ておば疾く〳〵來り給へねと、十月十日日興日向及び日朗の母熊王四郎なんと五六人傳き添ひ又警固の武士に前後を圍まれて依智を發足し途中も少の撓おく機會さへあれは折伏弘通に力を竭し多くの檀徒を得られたる

其勇氣の猛烈なる誠に感歎の外なかりけり、仝廿一日越後國三島郡寺泊に着き廿七日見送りの人々か何處までも御供にと請ふを世に憚りある身なれば却て日蓮か爲ならずと强ひて押し止め廿八日角田といふより出帆し海上恙なく佐渡國羽茂郡松が崎甲の瀨に着船す、三十日加茂郡新穗村本間六郎重連か邸に到る十一月朔日重連か取斗ひにて大野の鄕塚原に追放せらる、此塚原といふは死人を棄る荒凉寂莫の地なれば薄尾花の枯れたる、卒塔婆の朽ちたるか散亂し、晩鴉の聲も寒くして月の光りもいと靑し、人の往來も絶え〳〵なる其原中に一間四方はかりの辻堂めきたるあり、檐端傾き壁も疎に板敷筵も敷きて無けれは北海の荒海より吹き來る風は身に浸みて寒氣は骨を削るに異ならず、折から雪も繽紛と降り積みて法衣の袖は氷杜にとぢられ身動きさへも自由ならねば、日蓮今は食も絶へ飢へて死するか將た凍へて死するの外はあらずと決心なし肌身放さぬ釋迦像を、雪もてつくりたる壇上に安置し讀經三昧に餘念なきは勇しかりける事ともなり、斯くて我は日本第一法華の行者なり法門の爲には我か屍を此降る雪に埋むとも敎主釋迦多寶十方の諸佛にたに譽められなば身の面目なりと端座すること五日に及びけり、

茲に遠藤左衛門爲盛とて畏も　順德上皇か逆臣北條義時か計ひにて此絶海の孤嶋に行幸ましますける時供奉の御仰を承り　上皇崩御の後は念佛の信者となりて熱心無類の者あり、近頃日蓮といふ賣僧念佛を唱ふれは無

他渡雪難之図

間の地獄に落つと彌陀を始め其他各宗を謗り鎌倉殿の怒に觸れ此島に流罪せられしよし、如來の大怨敵彼を失ひなば一殺多生、千僧供養の功德よも增すからんいで一打と大刀腰にかいこみ雪踏み分けて塚原に來たり覗ひ見れば釋迦雪山の苦行も如是やと思ふばかり降り積む野邊の雪風に泰然讀經なしけり、唯一討と思ひしも高の知れた。る痩せ道心一問答して耻を搔かしめ其上にて殺すも遲からずと遠慮會釋もあらくれ男、土足の儘にて堂に上り我は念佛の行者なり汝狂僧法華ばかりが成佛して外の諸宗に得道なし我が宗旨の念佛をば無間の業と罵るよし証據ありてのことなりや疾く〳〵申し開かるべし左なくば容赦はありがたしと刀の柄に手を掛けて呪み付くるを、日

蓮驚く色もなく御身念佛者よてあるならは外の經文を說くまてもあし御身の賴む彌陀經に舍利弗舍利弗又舍利弗と三十八ケ度まて名を呼はれたる舍利弗尊者其經にて得道ならず法華經の利益によりて華光如來となりしにあらずや、念佛の無得道之にても悟らるべしと猶不審の條々こま〳〵と說き諭され始めて知りし本化の法門、夢の覺めたる心持して涙なからに懺悔をなし善にも强き菩提心直に法弟になしてと請ひ名を阿佛坊日得と改め夫婦かは〳〵人目を忍びて供養すること百日餘りその功德千日の修行に增るとて妻を千日尼とよび傚せり

塚原三昧堂の遺跡は今の根本寺の門前の地にして茫々たる荒野なりしを法難の後二百八十二年天文廿一年中

一宇を造立し塚原山根本寺と名けけり

二十年來日蓮に侍き孝行第一と聞ゆたりし日郎は師の坊か佐渡へ趣く時、今霄の寒氣につけても牢の中の事思ひ遣れて痛はしといふ書面を得てより明暮之を捧げ讀み泣き慕ふこと一方あらざりしかは、獄吏も師弟が眞實の情誼に感動し自然と日郎を尊び折々化導を受て遂に題目を唱ふるに至れり、或時牢守の者共蘆橘の實を六七箇日郎に供養しけるに是我か師の好ませ給ふものあり我れ自由の身なりせば雲山萬里を隔つるとも捧げんものをと潸然と泣きけり、牢守どもも其眞心を酌み我々よきに計らふべし御師の安否を尋ねてよと密に牢屋より出し疾く行き疾く歸れと、路金を布施するあれは乾飯を贈るあり杖に笠に何呉れと計ひける、日郎は翼もほしき心持して飛ぶか如くに急き行き師を訪ひたるに夢かと許り驚ろき喜び互に手を握り暫し涙に咽びけり、夫れより牢守か厚き情の物語りに齎したる種々の物抔捧け薄命不幸に沈みたる師の心を慰めたり、日蓮前後四年佐渡に在る間に日郎は師の坊を訪ひたること八ケ度に及びしといふ

日蓮佐渡に流されてより阿佛坊を化導し、なほ追ひ〳〵に歸依するものありけれは此國の僧侶ども就中生喩坊、慈道坊、印生等こは由々敷大事ありとて數十の人々を語ひ評議を凝したるも京鎌倉の名僧さへ敵對かたき日蓮あれは正法の應對に勝を占むるを覺束なし、十人廿人つゝ一團とありて鬼や角と答ふる遑なく四方八方より詰り問

はゞ飢寒に苦む半死人屈服あすは必定なり是も佛思報謝の一ありと、文永壬申の正月十六日各宗の僧徒等打ち集へ塚原三昧堂へ押し寄せたり斯くと聞きたる在家の男女惡僧日蓮奴か問答に詰る窮苦の狀を見んものと遠近より集りたるもおか〳〵の多數なりき、日蓮は平生人跡絶え、し此原中に俄に騷く物音は何事ならんとうち見れば諸宗の僧侶ども我れ先つ挫き吳れんづと交々惡口雜言なしてけり、こは多衆を恃み法論に我を屈せん計畧あるべしと斯くと見て取る日蓮は言葉靜に衆僧に向ひ、今日は法門の爲に來られたならん其儀なれば固より望む所なり罵詈讒謗は第二とし何なりとも質問せらるべしと泰然と構えけり、眞言は眼を剝出し汝は我宗を亡國と侮る証據いかに

といへば天に二日おく國に二王おし然るに弘法は大日を崇めて本佛とせり釋尊に對し二王二日をつくるもの邪法に非ずして何ぞと答え、淨土は口を尖らし南無といふ字は我宗の彌陀如來に備りたるを汝は盜て妙法蓮華經に冠らせたり日頃の高言に似合はぬことやと詰れは、南岳天台兩大師の記文に南無妙法蓮華經と見たり夫れ知らずや文盲にも程こそあれ問答無用と刎ね付る續て禪、念佛等樣々に問ひ詰れとも旭日一たび輝きて群妖あとを潛む、理を推し義を說きて敎導されければ更に手對おく降伏するあれは後込するあり聞しに增る才學やと舌を卷きてぞ感歎なすける、地頭本間重連も日蓮を保護して席に列り其博學智辯に感伏し講て檀徒となれり、重連二月十八日

早船來りて京鎌倉に軍事ありとの注進に付日蓮に見え自界叛逆難の當れるを談じ懇に暇を告け一族郎等を率る鎌倉へ走せ上れり、日蓮其間に大慈大悲をもつて正法を說き示し一切衆生の盲目を開くとて開目抄と名る書を著し鎌倉の弟子檀越に送れり、天台の僧にて此島に流された る最蓮坊歸依し今日來たりて法話を聞き居る所へ日興熊王鎌倉より參り師の恙なきを喜ひて共に涙に呉れにけり、兩人より鎌倉兵亂の物語りを聞き尋て來るは他國侵逼難あり、ゆめ〳〵注意を怠るなと繰り返す諭されける、四月七日鎌倉よりの沙汰として日蓮を同國雜太郡一之谷に移す然るに法華の宗風追ひ〳〵島内に吹き渡りしれば念佛眞言の輩日蓮天下の災變を祈る旨鎌倉に讒訴しけり、

鎌倉より改めて流人日蓮に交るものは重罪たるへきよし觸れ示したれば、日蓮布施の供物もなく復ひ衣食に事を欠き師弟もろとも困難しけるとぞ後邑主近藤清久一族歸依し、本間重連も歸島し其他富木、池上、阿佛坊夫婦を始め檀方の人々折々衣服を齎し布施を捧け安否を訪けるにぞ配所も今はおか〳〵にうきを忘る暇さえありけり

◎免許と身延

文永十一年二月八日執權時宗思ふ旨あればとて日蓮を赦免す宿屋左衛門其狀を受け、ひそかに日朗に渡しけるに日朗之れを首にかけ夜を日に繼て馳せ行き三月七日小木濱に着船し、翌日又々徒歩にて急きけるに海山遠き長の

旅身体疲かれにつかれ路さえ踏み迷ひければ側の石に腰を掛け日朗に侍る御師よ〳〵と呼ばゝり漸く日興に助られ菴室に至り赦免の狀を渡したるに日蓮を始め一同の歡喜譬ん方もなし、本間重連始め法弟檀越に別を告け三月十三日發足し十五日赤泊より越後柏崎に着き船す、途中處々にて折伏授戒し三月廿六日鎌倉に着き豫て弟子檀那等か設けたる小町夷堂橋北詰の菴室に入り互の無事を喜び宗運の萬歳を祝して欣喜踊躍せり、其後時宗も數々日蓮と會見し其心魂のゆるかぬ事武門の大丈夫より英雄なりと深くも推服し五月二日宗門弘通の免許を下せり

其文に曰く頃年あまた眞法の威力御感尤も深し、三國比類なき妙宗、後代ありかたき尊僧何れの宗かこれに比せん日本國中に宗門を弘る事其坊あるべからず

城左兵衛奉る

免許と身延

日蓮上人

本狀は奥州仙臺孝勝寺に傳來す（月日の下に時宗の黑印あり）是より法弟等の勇氣一層加はり遊説に調伏に法鼓を四方に鳴しけるに、大學三郎は家を以て寺となし宿屋左工門は邸内に一寺を建立し日朗の法弟日澄は一問答に眞言の正覺院を改宗せしめ昔の怨敵今の檀那となり隨從するものいと多し

日蓮此頃より遁世の志厚く兼ての約束なれば甲州波木井實長方へ赴かんと五月十二日日興日向等久本坊熊王なんとを從ひ鎌倉を出立し駿州各地を巡教し波木井方へ到りたるに一門の歡喜一かたならざりき、日蓮身延の幽寂な

る山水に退養せんと一庵の結構を實長に賴み甲州各地より信州蔦木にまで遊化し廿日あまりを經て歸れば、身延の山麓、溪川のほとりに三間四面の草堂は既に成り竣りて須彌壇上の香華空しく主人を待てり、日蓮歡悅かきりなく讀經の聲に謖々の松風を和し快く其心耳を濟ましけり、久本坊日元は佛門の八役といふ薪を採り水を汲み炊きを營み浴をすゝめ、花を摘み燈を點じ、席を清め庭を掃ふ事ともかひ〳〵しくつかへり、身延山は甲斐國巨摩郡の分内にして東は天子の嶺南は鷹取山西は七面山北は白根ケ嶽なり稜々天に聳へて樹木森々たり、富士川東を流れ急湍石に激して聲あり、谷深く水清く春の花は夏咲き秋の果は冬に熟る誠に本化の跡を止むべき靈境なり、

日蓮此山に入てより歸依の檀越より布施を受ることを好まず法弟に命じて粟を蒔き菜を植しむ、波木井も其心を察し人知れず穀物蔬菜を厨に入れ置くことたび〳〵なり、されと信者より衣食其他の供養引きも切ざる有樣にて人里遠き片山住居も何の不自由なく天上の福田、人間の長者と思はれたり、日蓮天氣快晴の日、身延の山巓より房州の沖合を望み遙に兩親の墓を拜して懷舊の涙を灑ぎ其後屢遙拜せりとぞ此古蹟を奥の院と稱し今に思親閣育恩堂の名を殘せり

宇多天皇の御宇弘安四年蒙古國より精兵二十餘萬軍艦四千餘艘を遣し我國を併呑せんとして九州各地に上陸し朝野震駭せり、將軍惟康親王　勅命により戰地に進發すへ

く定りたれとも國家の危急人力にては協はず、かねて數ケ度の忠諫に及びたる法華の行者日蓮に護念の力を借んものと身延に仰せありけるにぞ長六尺五寸幅五尺五寸の大旗兩面に日と月とを認め四方には四大天王、八方にハ八大龍王を畫かしめ中央日月のうちに輪圓具足の大曼陀羅を揮毫せり、宇都宮貞綱之を掲け戰場に向へり後貞綱之を預り池上宗仲につたへ、今は兩面を別ちて月の旗は身延山に日の旗は東京市本所區押上天松山最敎寺にあり今參考の爲最敎寺に傳ふる兩面之大旗來記を左に掲く

弘安四年辛巳五月二十一日從大元國蒙古賊船四千余艘人數二十四万余責來七月於九州防戰其時這八大龍王之御旗圖中日蓮聖人爲祈禱之大漫荼羅令書此御旗先立向

貞綱出陣之圖

親王九州給時某爲武之大將至九州則日本之靈神擁護有神風吹彼賊船其人數等不殘破異國え追拂給目出度旗成故我家是預給畢

十二月二十一日　　宇都宮貞綱判

或は傳ふ貞綱山陽道の兵を募り筑前に起く時備中に在りて捷報に接し其九州に至りたるは寇賊鎭定の後なりと

此頃に至りて法運大に開け信心歸依の參詣日々絶間なく菴室の內常に錐を立るの餘地もなければ止むを得ず六丈四面の大伽藍を營み、初めて身延山久遠寺と稱し十一月二十四日を以て盛なる開堂供養を行へけり

◎遺命と遷化

建長五年八月頃より病を發し食事も減じ起居何となく重たげに見ゆるにぞ四條比企等を始めとして追々に登山し機嫌を伺ひけるか、日蓮思ふところやありけむ池上宗仲の宅に入らんとて法弟檀那等に看護せられ身延を立ち出つ、池上にて病をつとめ建治年中建立したる本門寺の開堂式を擧け參詣の僧俗男女と共に誦經唱題して宗運万歳を呼びけり斯て日昭日朗日興日向日持日頂の六法弟を六老僧となす事、我か入滅の後は其遺骨を身延山に納め六老僧輪番に守護すへき事、經一麿は日朗を師と頼み學問或就おさは予か京都に弘通せざる遺意を繼き彼地にて法

を弘むへき事等一々遺命し。又弟子檀方へ遺物を配與せんとて日興に之を記さしめ、十三日卯の刻頃幽微き聲にて壽量品を誦み兜樓婆の香煙、慈顔を遠る比ひ眠るか如く大涅槃に入れり時に齢六十一歳、法弟檀信は愛別の涙に沈み唱題の聲さへ曇る朝時雨袖ほしあへぬ長月の日脚も疾く其翌十四日遺骸を荼毘に附し眞骨を收めて仝し廿五日身延に着す爾來法會怠りなく十二月二日中陰の佛事を濟ましあとを六老僧に囑み在家の男女は涙おからに下山なすけり

上人入滅後茲に七百年宗運の盛大にして信心歸依の增加したる講社八百幾十の多きに至れりと以て其一班を窺ふ

べし身延池上兩大本山の如き壯觀宏麗、一度此境に入る時は異宗の人も陶然信仰の念を起さしむるものありと亦盛なりと謂つべし

高祖日蓮傳終

附日蓮上人詠歌

笠森の觀音に詣てゝ

うきに降る涙の雨にぬれじとてけふ笠森の身に着するかな

甲斐の國内房にて

全臥にふす夜のあまり寢れねば月を身延に起きかへるかな

敎化の折に

たち渡る身のうき雲もはれぬべし妙の御法の鷲のやまかせ

同

おのづから邪にふる雨はあらじ風こそよるの窓はうつらめ

同

蓮の葉のかたちは船に似たれども離波の人を得しそ渡されね

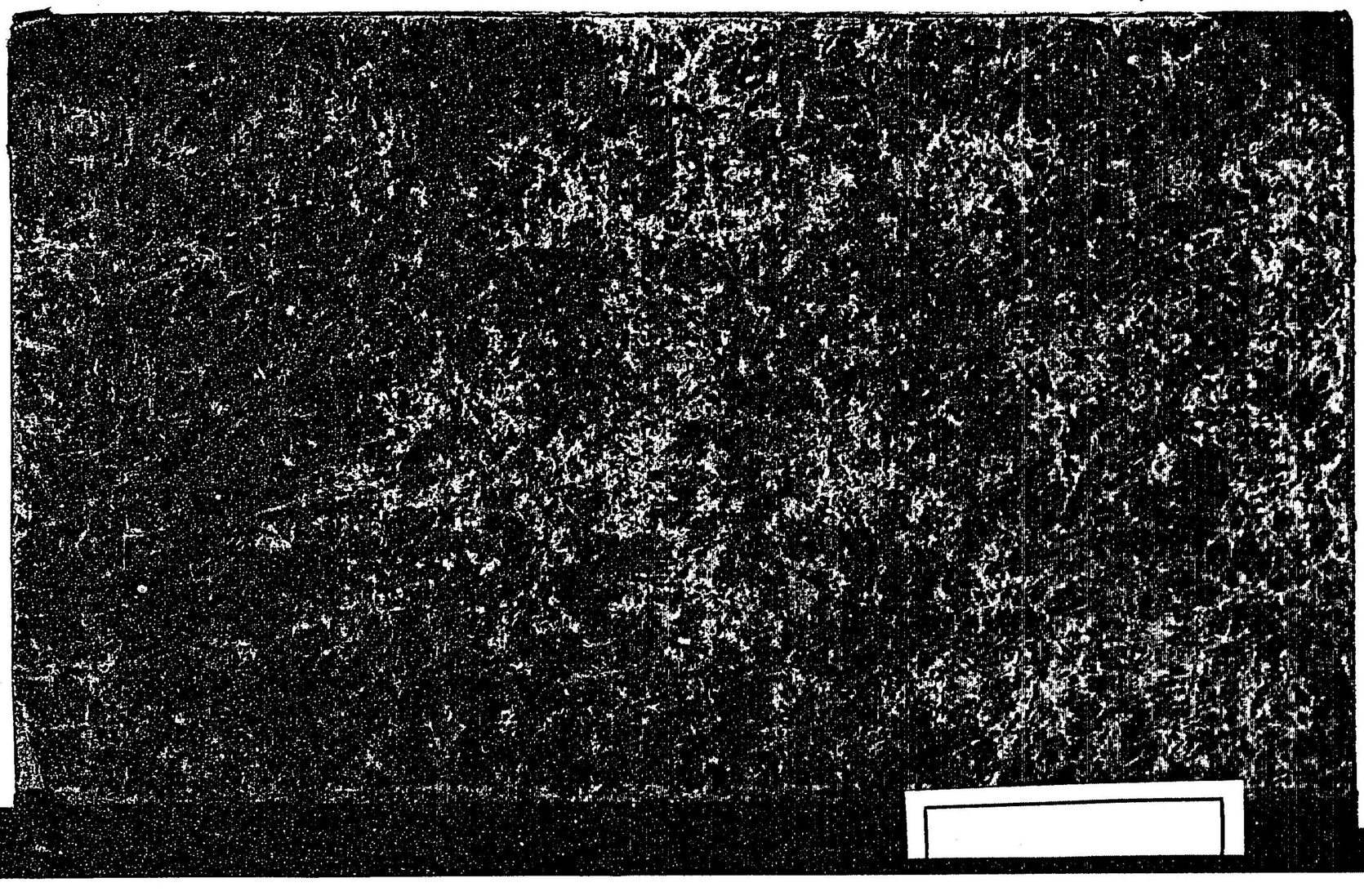
明治三十年十二月二十九日印刷
明治三十一年一月一日發行

正價拾五錢

著作者　東京市麹町區飯田町五丁目三十六番地　井上言信

發行者　同市神田區西小川町二丁目十一番地　須藤周三郎

印刷者　同市京橋區加賀町十三番地　島田用定

印刷所　同市京橋區加賀町十三番地　元眞社

77
130